日本産業衛生学会
近畿地方会ニュース

発行所　日本産業衛生学会近畿地方会（事務局）
〒634-8521 奈良県橿原市四条町840
奈良県立医科大学地域健康医学教室内
専用TEL・FAX.0744-22-1801
発行責任者・車谷典男（地方会会長）
http://jsohkink.umin.jp

新年のご挨拶

近畿地方会会長　**車谷　典男**

新年あけましておめでとうございます。近畿地方会の会員皆様のご健勝と益々のご活躍をご祈念申し上げます。

さて、紙面を与えていただいた機会に、恒例のごとく、昨年後半の地方会活動の振り返りと、本年の予定を述べさせていただきたいと思います。

昨年後半の地方会にとって最大の行事であった第53回近畿産業衛生学会は、11月２日（土）に、中山健夫学会長と森口次郎事務局長との息のあった運営で、京都大学医学部で盛大に開催されました。一般演題は30題を数え、京都開催としてここ最近では最も多い演題数の学会となりました。３会場に分かれた分科会の参加者は多く、さすが稲盛ホール、山内ホールの落ち着いた雰囲気の会場で、活発な討論が交わされました。詳細は本ニュースで紹介されていますが、午後の基調講演とシンポジウムの演者からは、学会のメインテーマである「病気を持ち、働く人々の支援に向けて」を分かりやすく解説していただくとともに、産業保健領域の取り組むべき新しい課題の方向性を示していただき、実に刺激的な時間を過ごすことができました。懇親会は一転して、和やかで、昨年の和歌山学会同様、大いに盛り上がりました。中山学会長そして森口事務局長の几帳面で丁寧なお人柄がよくでた学会であったことは、皆さんも感じられたことと思います。抄録集の表紙、地方会のホームページの活用は見事でした。裏方で頑張っていただいた多くの事務局の方々にも、地方会を代表して厚く感謝の意を表します。第３回近畿産業衛生学会優秀演題賞は津野香奈美氏（和歌山県立医科大学）と人見敏明氏（京都大学）が選出され、また中山学会長が設置された若手奨励賞は大浦智子氏（京都大学）と上野香奈氏（京都工場保健会）のお二人が選ばれました。将来の近畿地方会を担っていく研究者、実践者となられることを大いに期待します。

さて、今年は５月に岡山で全国学会がありますが、この時期を境に、第88回日本産業衛生学会の準備が本格化します。というよりは、2015年５月13日（水）から同16日（土）の成功を目指して、全力疾走が始まります。既に、地方会ニュースでもご紹介させていただいたように、第88回学会は近畿地方会が担当することが昨年の理事会で決定され、そのことは愛媛総会でも報告されました。これを受けて地方会の幹事会では、時の地方会長を企画運営委員長とすることが承認されました。企画運営委員会のWGのメンバーも承認いただき、10月16日には第１回WG会議を開催し、基本方針の確認といくつかの重要担当責任者の決定をいたしました。場所は大阪駅から徒歩５分のグランフロント内コングレ・コンベンションセンターです。第２回WGを本年１月31日に予定していますが、学会の成功には地方会の会員皆様の絶大なる支援を賜らなければなりません。

地方会の重要行事として、６月の地方会総会に加えて、11月15日（土）には第54回近畿産業衛生学会が開催されます。学会長は伊木雅之近畿大学医学部公衆衛生学教授で、会場は近畿大学本部（東大阪市）に決定しています。昨年の京都以上に、会員全員で活気のある学会にしていただくことを願っています。

また、本年は２年に一度の役員選挙の年です。９月頃から、地方会長・代議員、理事候補者と順次段階を追って選挙が行われていきます。新選挙管理委員長には豊川彰博幹事が互選され、新委員長のもと従来からの課題を解決しつつ、選挙全般を指揮していただくことになります。

産業保健には多くの専門職がかかわっています。専門職間の有機的な連携と切磋琢磨が産業保健を学問としても実践学としても進歩させます。今年も地方会活動にご尽力、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

第53回近畿産業衛生学会のご報告

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻
健康情報学分野　**中山　健夫**

2013年11月２日(土)、京都大学芝蘭会館において第53回近畿産業衛生学会を開催させて頂きました。京都府医師会・京都産業保健推進センターのご後援をはじめ、関係の方々から多大なるご支援を頂き、参加者数213名、一般演題30の充実した学術集会となり、盛会裏に終了することができました。この場をお借りして心より御礼申し上げる次第です。

今回の学会は社会的な要請を反映し、メインテーマとして「病気を持ち、働く人々の支援に向けて」を掲げ、気鋭の産業衛生学者である立石清一郎先生（産業医科大学産業医実務研修センター）に「有病者の就業支援」と題して基調講演を頂きました。それに続いて、シンポジウム（座長：古木勝也先生・村田理絵先生）では、臨床の立場から堀松高博先生（京都大学病院臨床研究総合センター／腫瘍薬物治療学講座）、八田告先生（八田内科医院・近江八幡市立総合医療センター腎臓センター）、研究者の立場から細越寛樹先生（畿央大学教育学部）、そして産業保健師の立場から川畑真理先生（大日本スクリーン製造）に、病気を持ちながら、働こうとする人々の支援に向けた様々な取り組みが報告され、それらを元に活発な意見交換が行われました。

学会学術担当理事・久保田昌詞先生とプログラム委員の投票による優秀演題賞には、和歌山県立医科大学の津野香奈美先生（研究部門）、京都大学の人見敏明先生（実践部門）、そして前回学会から表彰が開始された奨励賞には京都大学の大浦智子先生（研究部門）と京都工場保健会の上野香菜先生（実践部門）がそれぞれ選出されました。

懇親会（芝蘭会館山内ホール）では、京都府医師会の副会長・松井道宣先生から森洋一会長のメッセージをご代読頂きました。また祇園から舞妓さんと地方さんに登場をお願いして、華やかな踊りやお座敷遊びで学会後の楽しいひと時を過ごすことができました。

伝統ある本学会が一貫して取り組んできたテーマは「働く人々の健康を守っていくこと」であるのはもちろん、それと共に「『人間として働くこと』とはどういうことなのか？」という問いかけであると思います。それらは、どのような時代でも、色あせず、普遍的な価値を持つものに違いありません。今回の京都でのささやかな取り組みが、その長い歴史の一頁に加えて頂けることを心より嬉しく、光栄に感じております。

学会準備・運営に当たり諸般ご高配を賜った日本産業衛生学会近畿地方会の車谷典男会長、前回学会開催のご経験から様々なご助言を頂いた森岡郁晴先生はじめ、ご参加・ご支援頂きました皆さまに改めて御礼を申し上げて、報告とさせて頂きます。末筆になりましたが、次回、伊木雅之先生による近畿大学での学会のご盛会を祈念申し上げます。

プログラム・運営委員（順不同・敬称略）

氏　名	所　属
中山　健夫	(会長) 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野
小泉　昭夫	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻環境衛生学分野
三木　秀樹	医療法人 栄仁会 宇治おうばく病院
中川　克	立命館大学 保健センター・立命館大学安全管理室
古木　勝也	医療法人至誠会 古木内科医院
山田　達治	京セラ㈱本社 環境本部 安全防災部健康管理室
森山　和郎	パナソニック株式会社 デバイス社キャパシタビジネスユニット健康管理室
前山美佐子	パナソニック株式会社 デバイス社キャパシタビジネスユニット健康管理室
川畑　真理	大日本スクリーン製造株式会社
村田　理絵	一般財団法人京都工場保健会産業保健推進部保健指導課
森口　次郎	(事務局長) 一般財団法人京都工場保健会産業保健推進部産業保健推進室

顧　問

森　洋一	京都府医師会会長
畑　雅之	京都府医師会産業保健担当理事

京都大学事務局：高橋由光、宮崎貴久子、金谷久美子、中西さやか、上垣朋子、木下素子、舘盛早映子、他、大学院生・研究生。

第53回近畿産業衛生学会の報告

「第53回近畿産業衛生学会 一般演題の報告」

京都工場保健会
上原　亮子

今回印象に残った2題の発表について紹介いたします。

はじめに、京都大学大学院医学研究科、大浦智子先生の「高齢者施設の常勤介護職員における離職とその関連性の要因」では、高齢者施設の常勤介護職員の離職と職業ストレスなどの関係について分析された内容でした。離職とそのリスク要因との関連を説明するモデル「BO－EE（バーンアウト－情緒的消耗感）要因モデル」を構築されており、常勤介護職員では、限定的ではありますが情緒的消耗感が離職の直接要因となっていて、離職を防ぐ可能性のある対策がいくつか示唆されたとの報告でした。

もう1題は、和歌山県立医科大学の津野香奈美先生の「困難に立ち向かう力（レジリエンス）が高い労働者の特徴と心理的ストレスとの関連：1年間の前向きコホート研究」の発表で、近年再注目されているレジリエンスについて報告されていました。レジリエンス得点の高い人の特徴は、年齢（60歳以上）、既婚者、職種では保育士、職位では部長職であるなどの結果、また、経験年数や仕事の内容によりレジリエンスを獲得できる可能性があること、レジリエンスが高いと1年後のストレス反応発生を抑制する可能性があることなどとても興味深い内容で、今後のメンタルヘルス対策においても貴重な内容を知ることができました。また、この演題は若手奨励賞と優秀演題賞を受賞されていました。

私の発表したセッションでは、健康診断受診後の精密検査未受診者への対策に関する演題がいくつか発表されており、産業保健における課題があらためて浮き彫りになっているのではないかと感じながら拝聴しました。私自身は、「特定保健指導における5年間の効果の検討」というテーマで発表させて頂きました。発表後に受けたいくつかの質問を通じて、改めて今後検討する課題を見つける事が出来たと感じています。

今回の学会に参加して、いろいろな視点からの発表を聴き、新たな知識を得る事が出来ました。また、今後の方向性や学びを深めなければならない項目などを考える貴重な機会となりました。

第53回近畿産業衛生学会の報告

「第53回近畿産業衛生学会 基調講演を拝聴して」

京都工場保健会・産業保健推進部
櫻木　園子

第53回近畿産業衛生学会にて、産業医科大学産業医実務研修センターの立石清一郎先生より、「有病者の就業支援」と題してご講演いただきました。

疾病を抱えながら働くときに、「あなたにとって仕事とは？」「職場にとって仕事とは？」という根源的な問いが突きつけられます。就労世代でがんと診断されるのは年間22万人とのことで、生活の欧米化、健康診断により早期発見されることなどが要因として考えられるとのことでした。治療の進歩に伴い全がんの5年生存率は50％を超えており、がんを抱えながら生きていく、「慢性疾患としてのがん」としてとらえる必要を示されました。治療ではより低侵襲な方法が開発・選択され、日常生活を送ることができるようになりました。

障害者雇用促進法で企業には「合理的配慮」として本質的業務以外の障壁を取り除くことが求められています。対応を求められる企業では、「わからない」というのが実感で、安全配慮、治療、仕事のそれぞれの面から整理する必要があるとのことでした。確かに、「わからないから慎重に判断する」ということになりますし、そのために労働者の働く権利が過剰に制限されてしまうのではないかと思いました。「これぐらいならできる」「ここに気をつければこれは大丈夫、これは難しい」ということを、産業医が労働者、職場と一緒に考えていくことで、疾病を抱えた労働者の仕事の可能性を引き出すことができればと思いました。

就業判定においては安全配慮をするために、疾病経過、事故が起きた時の対応、受診状況について確認することが必要だとのことでした。また、就業に際し、他の労働者の負荷についても注意する必要があること、その労働者のコア業務は何か、周辺業務は何かを見て、できることまで制限しないこと、道具などを工夫することによってdisabilityが問題にならないようにすればdisabilityがなくなる、という考え方を示されました。

「働く義務と権利をできるだけ守る」という言葉が印象的でした。産業医として、疾病を抱える労働者、その周囲にいる労働者、職場にとってより良い支援ができるよう今後も取り組みたいと思わされました。

第53回近畿産業衛生学会の報告

「第53回近畿産業衛生学会シンポジウムの報告」

北大阪地域産業保健センター
㈱健康管理室
益江　淑子

平成25年11月２日(土)に近畿産業衛生学会が京都大学医学部芝蘭会館にて開催されました。

最初に、立石清一郎先生が「有病者の就業支援」とのテーマで基調講演をされましたが、産業医が就業上の意見を述べる際に留意すべき点や使用するツール等をご紹介頂きました。シンポジウム「病気を持ち働く人々の支援に向けて」では４名の先生方に御講演頂きました。

堀松高博先生は、「がんは働く世代の疾患としても最も重要な疾患であり、慢性の疾患になりつつある。」として、2012年の「がん対策推進基本計画」の説明とがん罹患者の社会復帰の現状、問題点、早期発見、がん予防に関して、臨床データーや先進治療について紹介頂きました。

八田告先生は、「慢性腎臓病（CKD）は1,330万人と言われ、８人に一人がCKDとされている。CKDの就労者にとって、人工透析は切り離すことの出来ない事である。」として、人工透析を受けながらの就労について雇用者側に理解されない事が多いこと、自宅透析により予後の改善が期待されること、主治医と産業医との連携が重要である事を具体的な事例を通して話されました。

細越寛樹先生は、近年注目されている閾値下うつ状態への対応の１つとしてのマインドビクスを紹介されました。マインドビクスはうつ病への有効性が実証されている認知行動療法を採用しており、専用のテキストを用いて電話によるカウンセリングを実施するプログラムですが、その有効性や利便性、予防志向的にも使える事などの特徴についてご紹介されました。

川畑真理先生からは、私傷病による休職者の職場復帰支援のために、企業独自の制度を新たに設け、長期休業者の支援への取組をご紹介頂きました。

今回のシンポジウムは、主治医からの意見を直接伺うことができた貴重な機会でした。また、主治医と産業医・産業保健スタッフの連携の重要性を再認識し、連携により就業上の配慮が合理的に実行できると感じられた有意義なシンポジウムでした。

第53回近畿産業衛生学会の報告

「優秀演題賞を受賞して」

和歌山県立医科大学
医学部衛生学教室
津野　香奈美

この度、優秀演題賞を受賞致しました。数々の興味深い演題の中から選んで頂けましたこと、本当に感謝申し上げます。本研究は、労働者にとってしんどい時代が続いているなか、逆境に強い労働者はどういったタイプかに関心を持ち、前向きコホート研究で明らかにしたものです。発表後ご質問もたくさん頂き、本研究の発展に貴重なご示唆を頂きました。これまで主に関東地方の労働者を対象にした調査が多かったのですが、今後は近畿地方の労働者に焦点を当て、より近畿地方会に貢献できるような研究ができればと思っております。受賞の名に恥じない研究を推進すべく、身が引き締まる想いです。今後ともご指導・ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

京都大学大学院医学研究科
環境衛生学分野
人見　敏明

近畿地方会優秀演題賞をいただき、まことにありがとうございます。この度賞をいただいた「スリランカの農民の慢性腎臓病」は、スリランカの中北部地域における原因不明の慢性腎疾患の研究であり、現地の社会経済発展に多大な影響を与え、衛生学的にも喫緊の課題であります。現地でのフィールドワークに参加、環境研究と遺伝研究の異なる側面からアプローチする得難い経験をつませていただきました。京都大学の小泉昭夫教授を始め、北野病院、ペラデニア大学、徳島文理大学の共同研究者の皆様に深く感謝しております。今後ともご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

第53回近畿産業衛生学会の報告

「第53回近畿産業衛生学会若手奨励賞を受賞して」

京都工場保健会
総合健診センター
上野　香菜

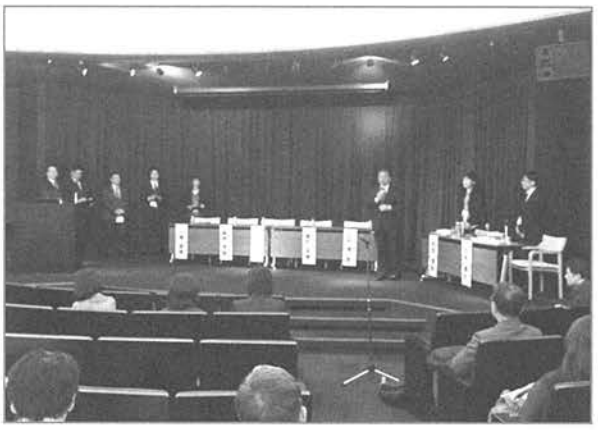
この度は、第53回近畿産業衛生学会若手奨励賞を頂き、大変光栄に思います。

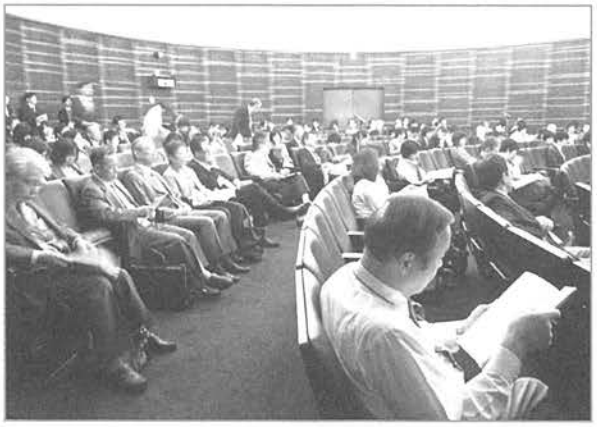
発表は「精密検査未受診者の意識調査」という演題で、受診者様に未受診の理由や思いを直接聞き取りまとめたものです。精密検査の受診率が低迷し受診率の向上が重要な課題となっている今、弊会では一人一人の受診者様の思いや考えを共有し、問診や面談を通してこの課題に取り組み始めています。今回の受賞は、そうした日々の取り組みに対し頂いたものと、喜びと同時に身の引き締まる思いを実感しております。今後は、調査で得た内容をもとに、受診に繋げられるよう、より効果のある取組みにしていきたいと思います。ご指導頂いた皆様に感謝申し上げます。

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系健康情報学分野／
星城大学リハビリテーション学部
作業療法学専攻
大浦　智子

この度は、第53回近畿産業衛生学会若手奨励賞を頂き、大変光栄に思います。今回の受賞にあたって、今までご指導頂いた中山健夫先生をはじめ、これまで支えてくださった方々、そして研究に協力してくださったすべての方々に深く感謝致します。私は、医療・介護職員の職業ストレスと離職との関係を明らかにすることによって、医療・介護領域のマンパワー不足の軽減とケアの質向上に役立てたいと考えています。受賞対象となった報告は、介護職員の離職要因としてのバーンアウト、職業ストレス、抑うつ等について、共分散構造分析を用いてモデルを構築しました。この受賞を励みに、産業衛生における支援技術の開発に努めていきたいと思います。

近畿産衛学会会場風景





『第23回産業医産業看護全国協議会に参加して』

パナソニック健康保険組合
健康管理センター
健康管理支援室
橋口　克頼

2013年９月26日から28日まで名古屋国際会議場にて、「連携、そして発展！産業保健の未来を問う」というメインテーマで第23回産業医・産業看護全国協議会が開催されました。

メインテーマにある『連携』というキーワードは、昨今の多岐多様な産業保健の問題への対処や解決には様々な面での連携が必要であるという意味合いがあるとのことで、企画の中にはそれらを意識できるものが数多くみられました。リレーワークショップでは「産業保健における連携」というタイトルで産業保健職間における連携、シンポジウム５では「がんを抱えながら就労を考える」というタイトルで臨床現場と職場の連携、その他にも教育・研究機関である大学と産業保健現場との連携などキーワードを意識できる内容が随所にみられました。

メイン企画は「大討論会：産業保健の未来、３つの課題を問う」というメインテーマと同様のタイトルで、「①新型うつ：自己責任or企業責任？」「②次の主役は？衛生管理者vs産業看護職」「③労働安全衛生法：拡大すべき、縮小すべき？」という３つの課題に対してそれぞれディベート形式で実施されました。

私自身「①新型うつ：自己責任or企業責任？」では、ディベーターとして「新型うつは自己責任である」と主張する役割をさせていただきました。ディベーター二人がそれぞれの主張を行い、反証は１回ずつ、次にフロアーからの意見をもらい、最後はどちらの立場を支持するかをフロアーの方々に挙手していただくという流れでした。28日土曜日の朝一番の時間帯で、非常に緊張した雰囲気で始まりましたが、トップバッターの新日鐵住金の宮本俊明先生が情感のこもったかつユーモアも含んだ主張をされ会場全体が非常に盛り上がりました。私は続いての出番でしたが、その盛り上がりのおかげで緊張しすぎることなくプレゼンテーションができました。メインシンポジウムは、最後の課題までその熱が冷めずに終わりました。

後日、学会の事務局から聞いた話ですが、当初の予想をはるかに上回る参加人数だったそうで、内容とともに非常に盛況な学会だったようです。全体の印象としては、貴重な経験をさせていただいたとともに、改めて産業保健における『連携』の重要性を意識させられたものでした。

『第23回日本産業衛生学会産業医・産業看護全国協議会に参加して』

近畿地方会産業看護部会
大脇　多美代

2013年９月26日（木）～28日（土）３日間、名古屋国際会議場と愛知教育大学の２会場で開催された。

企画運営委員長は、東海地方会　斉藤政彦先生（大同特殊鋼）で、本協議会のテーマは「連携、そして発展！産業保健の未来を問う」である。近年日本企業を取り巻く環境は、急速かつ劇的な変化を遂げ、労働者の健康問題は増大する傾向にある。産業界における多岐多様な健康問題へ対処し、労働者の健康保持増進のため、関係するすべての職種がそれぞれの役割を果たした上で連携することが求められている。これらを鑑み、メイン企画では労働者の健康管理の在り方や産業看護職、衛生管理者の可能性、産業保健のあるべき方向性を参加者全員で討論していきたいと企画されていた。

当日の参加数は約2,000名余、ポスター発表が54題、シンポジウム、教育講演、事例検討と盛り沢山で全国からの真ん中という地の利もあって、大変盛況であった。特にメンタルヘルスを取り上げた会場では、立ち見が出るほどで、各職場での問題として関心が多いのはどこも同じであると感じた。他には「がんを抱えながらの就労を考える」など、いずれも現場の問題に視点に当てた内容であり、大いに研鑽の場になった。

メイン企画の大討論会：産業保健の未来、３つの課題を問うとして、①「“新型うつ”企業責任or自己責任」演者は宮本俊明先生（新日鉄住金）、橋口克頼先生（パナソニック）②「次代の主役はどっち？衛生管理者vs産業看護職」では對木博一先生（ニコン㈱）、中尾由美先生（中尾労働衛生コンサルタント事務所）③「労働安全衛生法：拡大すべき、縮小すべき？」については、堀江正知先生（産医大）が歴史的な背景から英米など海外の状況の説明も加えながら将来の産業保健政策のあるべき姿を話された。いずれも結論が出るものではなく、それぞれの立場や考え方を拝聴し、聴衆者が考えるという姿勢が求められたシンポジウムであった。

この協議会は春の学術的な学会とは違って、４部会が共同で実際の活動や実地を知るための教育研修が主となっているので、参加して見聞を広げる良い機会であった。

産業看護部会からのお知らせ

皆様、新年明けましておめでとうございます。
昨年は産業看護部会活動にご支援、ご協力を賜り心よりお礼申し上げます。
新年を迎え、昨年の３つの活動を振り返ってみたいと思います。

■産業看護部会活動の紹介と会員数増加にむけて

研修会開催時に部会活動報告として活動方針、部会組織、活動内容等の説明の時間を設け、より理解を深めて頂けるように努めました。また、会員数増加に向けてのPR活動を行いました。会員が昨年より29名増加し305名となりました。

■ホームページの充実にむけて

近畿地方会産業看護部会のホームページは月１回以上の更新を行い、活動紹介、顔写真付の幹事メッセージを掲載するなど、部会活動の見える化を図りました。お陰様でアクセス件数が徐々に増加しています。ぜひ訪れてみてください。

■実りある研修会にむけて

７月に１回と特別研修会を８月に開催しました。産業看護業務においてデータの収集、解析、報告書の作成等に統計処理は不可欠な手段となり、「統計の基礎」を学習した後に、実際にパソコンを使用しての統計演習をおこないました。統計がより身近になったと好評でした。
１月25日に定例研修会・産業看護部会本部部会長との懇談会、３月には近畿地方会において最後の開催となる産業看護講座「短縮Ｎコース」を開催します。まだ間に合います！奮ってお申し込みください。

平成27年度からは新システムによる教育制度が導入されますので、今年は移行期の年でもあり、現教育制度から新システムへとスムーズに移行できるように支援してまいります。
今年も部会員の皆様のご理解、ご協力をどうぞよろしくお願いします。

近畿地方会・産業衛生技術部会の討論会のおしらせ

討論会にはどなたでも参加できます。多くの方の参加をお待ちしています。

働く人をはじめ、一般の生活のなかで多くの人々は何らかのストレスを抱えています。このストレスの原因の一つに人と人とのコミュニケーション不足があります。このコミュニケーションを解決する対策に、人との心の通じる会話があります。
今回、元NHKアナウンサーに講演をお願いしました。アナウンサーの職業とは、上手な話し方、聞き方など上手なコミュニケーションの取り方について、お聞きしたいと思います。またフリー討論会も考えています。医師、看護師の先生方は診察の際の会話に参考になるかもしれません。是非技術部会講演会に御参加下さい。

主　催：日本産業衛生学会・近畿地方会・産業衛生技術部会
日　時：平成26年２月９日（日曜）13時00分～16時30分
場　所：貸会議室　ユーズ・ツウ
（大阪ヒルトンホテル、四ツ橋筋側）
西梅田駅４-B出口すぐ　電話 06-6345-1326

講演会内容　１）13：00から13：15
今年度の技術部会活動について
技術部会世話人　河合　俊夫
２）13：30から15：30
仮称「上手な会話とアナウンサーの職業とは」
元NHKアナウンサー　生熊　雅夫
司会者JICA関西　常　瑠璃子
３）15：45から16：30
作業環境測定に用いられる測定器
新コスモス電機株式会社　浅香　尚民
司会者　中災防大阪センター　山室　堅治

詳細な内容については事務局にメールで問い合わせください
事務局　河合　俊夫
tkawai@jisha.or.jp

第15回近畿臨床産業医学フォーラムのお知らせ

日　時：平成26年２月12日（水）18：00 ～
場　所：ＡＮＡクラウンプラザホテル大阪（全日空ホテル）
３階「万葉の間」
大阪市北区堂島1-3-1
TEL（06）6347-1112（代表）
参加費：1,000円
申込み：近畿地方会ホームページから用紙をダウンロードし、FAX(06-6831-6637)にてお申し込み下さい。
締　切：２月５日（水）
テーマ「職域における高血圧対策」
18：00 ～製品紹介　MSD（株）
18：15 ～Ⅰ．基調講演
「最新の高血圧管理と治療
-2014高血圧治療ガイドライン改訂を踏まえて-」
座長　日本生命済生会附属日生病院
予防医学センター　藤岡　滋典
講師　京都工場保健会診療所
所　長　武田　和夫
19：15 ～Ⅱ．パネルディスカッション
「職域における高血圧の管理と
産業保健スタッフの役割」
座長　日本生命済生会附属日生病院
予防医学センター　藤岡　滋典
<パネリスト>
(1)パナソニック（株）
エコソリューションズ社本社健康管理室
産業医 角谷　学
(2) 三菱化学株式会社
大阪支社　業務部門　保健師　岡田　優子
<コメンテーター>
京都工場保健会診療所
所長　武田　和夫
＊当日は軽食をご用意しております
＊本会におきましては、規則により旅費の負担が出来ません事をご了承下さい。
共　催：日本産業衛生学会近畿地方会、MSD株式会社
問合せ先：第15回近畿臨床産業医学フォーラム事務局
（担当）MSD㈱　多井
TEL：090-5017-8218

シリーズ 自己紹介

私たちの職場（28）

京セラ株式会社

本社専属産業医　山田　達治

最初の専属産業医として

私は2006年に京セラ㈱本社の専属産業医として入社しました。社内では特に表立った紹介がなされることもなく、看護師と２人体制でひっそりと健康管理室をスタートしました。健康管理システムどころか、最初の数週間はパソコンすら手元になく、紙とペンで仕事をしていたことも思い出の一つです。後で知ったことですが職場の人々は、「健康管理室にいる人は誰なんだ？産業医って医者なのか？」などと話し合っていたそうです。

健康情報管理システムやカウンセラー等多くのコメディカルスタッフといった充実した制度を持つ他社が眩しく見えることもあります。その反面、最小限の費用と人手でここまで一定の成果を出せるようになったことは私たちの誇りでもあります。

意外に容易だったメンタルヘルスケア

私以前には専属産業医の常駐がなかった本社の人々の多くは産業医という存在を知らなかったため、当初は少なからず警戒心を抱かれました。また、「力いっぱい働くことを喜びとする」という京セラの厳しい社風は、メンタルケアという思想を容易には受け入れないように思われました。しかし予想に反して、最初から手応えを得られたのはメンタルヘルスケアの仕事でした。

メンタルヘルスケアというコンセプトには強い反発を示した管理職たちも、もともと「大家族主義」の仲間思いの人達です。不調者の再適応支援に必要な具体的な施策について粘り強く協力を求めれば、なんだかんだと言いながらも温情ある措置を取ってくれることも多く、復職支援は最初の１人目から成功例が続きました。今日までの７年半で、復職成功率は94％です。

こうして１人またひとりと復職に成功するうちに理解が得られるようになったのか、早期発見・早期対応にも積極的に協力してくれる方が増え、４年目以降は休職発生件数がピーク時より大幅に減少しています。ストレス調査ほかお金がかかることは殆ど行なっておらず、コストパフォーマンスは優良ではないかと思います。

もちろん、様々な理由で職務や人間関係にうまく適応できず、さんざん苦しんだ挙句に不調に至った人々ですから、再適応支援は容易なことばかりではありませんが、そうした困難に対して感情論とは別の角度から解決を図れることが産業保健の醍醐味であると感じています。

全社的な健康管理精度の向上

専属産業医会議を定期開催し、全社的な体制を整備し始めたのはようやく2010年からです。「健康診断事後措置を正しく行おう」という基本の基本から始めた会議でしたが、ここでも成果が現れたのはメンタルヘルスケアでした。新型うつ病云々という虚しい議論を一切排し、我々が為しうる支援策に的を絞ったことが良かったのだと思います。

驚いたのは、弊社の専属産業医の大半を占める外科系医師たちの復職支援の上手さです。最初に基本的な手法を説明した上で実際のケアに取り組んで頂いていますが、それぞれの事業所で工夫をこらした指導が行われ、復職成功率もぐんぐんと向上しています。計画的なリハビリによって体力や日常生活レベルの向上を指導することは、彼らが日頃やっている仕事に近いのかもしれません。

この会議は産業医の実務に関するノウハウの共有や精度運用のブラッシュアップを図るものであり、社内の規定や体制に関する決定を行う権限はありません。ノウハウ先行で産業保健の意義が認識されるようになった現在、体制の充実が次の課題として浮上してきています。

体制の整備は模索中

入社８年目を迎える現在も、本社健康管理室は私と看護師と２人体制に変わりはありません。全国の営業所や海外出向中の従業員の健康管理も本社で管轄しているため、健康診断結果を見る対象人数は3,000名弱、時にマンパワー不足を感じることもあります。それでも、その人柄で誰からも慕われる看護師は、常に私の百人力のパートナーでした。また、事業所の専属産業医の大部分は臨床の医局から派遣された期間限定のローテーターでありながら、事業所スタッフらとよく協調し誠実に仕事に取り組んで下さっています。さらに、多くは産業医経験なしに赴任してきた医師たちをサポートしてくれる事業所の保健師、看護師らの貢献も多大なるものがあります。

こうして振り返ると、医療資源が豊富とはいえない状態が、個々の専門職らの努力によって補われていると言わざるを得ません。産業医学部門の取り組が社の事業として理解され根付いていくよう努めたいと考えています。

会員の声

職場のメンタルヘルス対策ー最近の動向に想うこと

神戸親和女子大学大学院
文学研究科（精神医学）
丸山　総一郎

2013年５月にDSM－５が出版された。アメリカ精神医学会が定めた精神科医が患者の診断をする際の指針を示したもので、正式名は「精神障害の診断と統計の手引き（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders）第５版」である。2013年５月に福岡で開催された日本精神神経学会の特設コーナーでこの英書が飛ぶように売れていた。実に19年ぶりの大改訂である。当初の予定より遅れること２年、かかった費用は2,500万ドルだという。ざっとみたところ多軸評定はなくなり、診断カテゴリーや障害名称が従来とは異なるものも散見され変更点はかなり多い。既にこのDSM－５への批判が数多く出ている。DSM-Ⅳの作成委員長だったアレン・フランセスの著書『〈正常〉を救え』では、精神医学を混乱させるとして、DSM－５への警告の記述が辛辣である。彼は、DSM－５が精神障害のインフレを招き、病気からの快復力（resilience）を阻害する方向に用いられかねないと論じている。元来、DSMもICDもエキスパートが使用すべきもので、機械的に用いるものではない。誤用や拡大解釈の危惧については、これまで以上に留意しなければならないだろう。

ところで、ストレスチェックを見据えた労働安全衛生法の一部改正が労働政策審議会安全衛生分科会で検討されている。その一方で、導入に対する懸念が、日本精神神経学会からの意見表明や当学会からの見解や報告として公表されている。それは、ストレスチェックの科学的有効性の問題、セルフケアに重点を置いた健康情報区分の問題、面接指導の義務付けの問題、産業医業務への支障の可能性などである。この改正は自殺などさまざまなメンタルヘルス不調の指標の高止まり状態あるいは増加傾向の打開策のひとつであろうが、慎重かつ実効性のある制度設計と適切な事後対応が望まれる。

もうひとつの最近のメンタルヘルス対策の動向として、未然防止の第一次予防の重視とポジティブな側面に注目したアプローチが挙げられる。職場復帰などの第三次予防や早期発見・早期治療の第二次予防から第一次予防へと優先課題が移ることで、医療に加え経営やマネジメントを含んだ連携･協働が重要となってきた。そのため、今後、報酬や組織の公正性、ワーク・エンゲイジメントなどポジティブな心の健康への取り組みが必要で、メンタルヘルス対策の新たなストラテジーとして、発想の転換とより抜本的なエビデンスに基づいた有効な対応が期待される。

近畿産業衛生技術部会に入会して

大阪産業保健推進センター
河村　沙江

商業高校を卒業後、キーパンチャー・ネットショップ店長・建設業の総務・自動車整備業の総務を経て、大阪産業保健推進センターで働き始めて早いもので10年目になります。

どの会社も50名以下の中小企業で、産業医どころか健康診断すら省略可能な項目は最初から会社が勝手に省略していて、大阪産業保健推進センターに入社し生まれて初めて血液検査の結果が載っている健診結果を頂いた時、とても感動したのを覚えています。久しぶりに過去の定期健康診断結果をひっぱり出して並べて愕然。年々右肩上がりで増加を続ける体重。大阪で開催される第88回日本産業衛生学会開催（平成27年５月）までには標準体重に戻すことを今年の目標にしたいと思います。

一般事務だった私ですが３年前のある日、原一郎先生が『これだけ長く勤めているのだから衛生管理者を取られたらどうですか』と背中を押してくださいました。合格をご報告するとニコッと目を細められ『次は衛生工学ですね』とおっしゃられ、一昨年衛生工学衛生管理者を取得しました。

衛生工学衛生管理者の講義は４日間朝から晩までみっちり講習と実習と試験があり、肉体的に大変でしたが、“衛生管理がなぜ必要なのか”を見つめ直し、産業保健活動には知識と知恵と経験が必要であること、自分はまだまだどれも不足していることを痛感しました。

もっと勉強したい！と思い近畿技術部会に入会するきっかけになりました。（日本産業衛生学会近畿地方会産業衛生部会の活動内容については河合先生が近畿地方会ニュース№90（７）で書かれておられます。近畿地方会のホームページにバックナンバーPDFがありますので興味のある方はぜひご覧ください）

また日本産業衛生学会で得た知識をいかに大阪産業保健推進センターの業務に還元してゆくかも今後の課題です。大阪産業保健推進センターが労働衛生活動に貢献できるよう、また私自身、本会においてお役に立てるよう精進して参りますので会員の皆様方のご指導、ご鞭撻の程どうぞよろしくお願いいたします。

会員の声

産業保健活動に関わって

大阪府総務部人事局
照屋　直美

公務職場に就職し、保健所勤務でなく職員の健康管理を担当する部署に配属されたことが産業保健に携わるきっかけで、もう35年になりました。
当初は結核対策が最優先で、１次健診から精密検査、治療に結びつけるための迅速な対応と、治療を開始した職員の疾病管理が大事な仕事でした。

80年代から成人病対策にいっそう力を注ぐようになり、保健指導や健康教育を通し予防活動に積極的に取り組んでいきました。1990年以降、健診項目等の充実が図られるとともに、保健師業務に占める割合は大きくなっています。中でも、出先職場で実施する保健指導は、職員が働く現場を知るよい機会で、職場環境や作業実態を身近に知ることができます。印象に残っているのは、振動業務のある職場です。腰痛を抱える職員の多い土木関係の現場で、急な山の斜面に立って草刈り機を使う作業や足場の悪いところで体をくの字に曲げながら重い刈払機を扱い作業をする状況を見たとき、新たな発見とともに腰痛予防や事故防止の指導の難しさを痛感しました。

それからは、仕事内容や作業環境を出来るだけ詳しく聞き、有機溶剤を使う職場や騒音職場などで理解しにくい、疑問と思うときは「百聞は一見にしかず」とその職場に出向き話を聞くなどしながら、「働く職員」のイメージが作れるように努めてきました。「仕事のことよく知っているね」言われたときは同じ土俵に立てたようで、信頼関係が生まれ、話がスムーズに進みます。意外に見過ごしていたことに気づくことや、また教えられることも多々ありました。

最近は長時間労働や職場のメンタルヘルスなど眼に見えにくい問題が増え、職場の実態把握が今まで以上に重視されます。日々の活動の中で、問題を感じ取れる感性を磨き、働く職員のサポートをしていきたいと思っています。

第３回
大阪マラソンに出場して

三井住友海上保険株式会社
専属産業医
竹村　　芳

私が、ジョッギングを始めたのは18年前の44歳時です。所属していた大阪大学第二内科で内臓脂肪型肥満の研究をしていて、自分の内臓脂肪面積をCTで測定したところ増加していたことが契機です。毎朝30分ほど近所の公園を走ることを続け、半年後に正常化し、結果が得られたことが、その後もジョッギングを継続する動機付けになっています。

10月27日の第３回大阪マラソンは、好天に恵まれ、気温20度と、走るにはベストコンディションでした。実は、左足に足底腱膜炎を起こして、長距離を走るのが不可能な状態が続いており、完走できるかどうか不安でした。午前９時に大阪府庁前をスタートし、大阪城周囲、中央公会堂、大阪市庁、御堂筋、大阪ドーム、通天閣を回って、南港にあるインテックス大阪がフィニッシュです。全員がシューズに計測チップを装着して走るので、各自のラップタイムや走行順位がリアルタイムにスマホで見ることが出来、予想通過タイムを表示してくれます。これによって、応援する人がランナーを正確に待ち受け出来ます。私の場合も、応援に来て戴いた方が、大勢の中から私を発見し、声をかけてくれることができました。沿道からの声援は、大変ありがたく、走り続けるのにパワーをもらいました。着ぐるみを着て走るランナーもたくさんいて、彼らへのかけ声は的確で、楽しいものでした。コース途中では、給水の他に軽食が出され、色々な食べ物が提供されましたが、私には一口稲荷鮨が一番ありがたくて、美味で、ほおばりながら走りました。30kmまでは５kmを30分弱のペースで快調に走ることが出来ました。しかし、30kmを過ぎた頃から急に苦しくなり、35km過ぎの南港大橋のアップダウンで両足筋肉の至る所で、痙攣がおこり、歩くのと小走りするのとを繰り返す状態となりました。最終の２kmでは20分近くかけて、ようやくゴールする事ができました。本大会の医療スタッフは医師132人ら計約800人で、AEDは昨年より５台多い75台が用意されたそうです。幸いにして、AEDのお世話になることも、足底腱膜炎の悪化もなく、無事に完走できて、感謝しています。

議　事　録

2013年度第３回幹事会詳細議事録

日　時：2013年11月２日（土）12：00～12：45
場　所：京都大学大学院医学研究科Ｇ棟３Ｆ演習室
出　席：車谷・清田・圓藤・久保田・山田・中島・宮上・伊木・岡田・河合・北原・木村・鮫島・鈴木・竹村・豊川・藤岡・丸山・宮下・森岡・森口（順不同・敬称略）
欠　席：伊藤・井上・大脇・島・中西・廣部（順不同・敬称略）

１．第53回近畿産業衛生学会（京都）会長ご挨拶

中山健夫学会長からの主催に当たっての挨拶に引き続き、近畿産業衛生学会優秀演題賞および第53回近畿産業衛生学会若手奨励賞の選考結果報告があった。優秀演題賞は津野香奈美氏（和歌山県立医科大学）と人見敏明氏（京都大学）の二人、若手奨励賞は大浦智子氏（京都大学）と上野香奈氏（京都工場保健会）の二人に授与されることになった。

２．第54回近畿産業衛生学会（大阪）準備報告

伊木雅之次期会長から、2014年11月15日（土）に、近畿大学本部（近鉄大阪線長瀬駅下車徒歩10分）で開催すること、大阪選出の幹事を中心に運営委員会を立ち上げた等の報告があった。

３．第55回近畿産業衛生学会（兵庫）学会長の決定

兵庫県所属の幹事の話し合いの結果、丸山総一郎幹事（神戸親和女子大学教授）を学会長とする推薦があり、幹事会でこれを承認した。

４．選挙管理委員会委員長の選任報告

豊川幹事から、選挙管理委員の互選の結果、豊川幹事を選挙管理委員長に選任したとの報告があった。

５．第88回日本産業衛生学会　第１回企画運営委員会WG報告

車谷企画運営委員長から、10月16日に開催した第１回WGを開催したこと、その中で、開催日を2015年５月13日（水）～16日（土）とし特別研修会は開催しないこと、JTBコミュニケーションズと正式契約し、今年度予算は地方会積み立て助成金を充てること、口演を重視すること、特別プログラムと一般演題の同時並行プログラムとすること等など骨格について、基本的な共通認識を持ったことの報告があった。

６．地方会ニュース発行とHPの更新状況

山田広報担当理事から、地方会ニュースは１/15、５/15、７/15、10/15の年４回発行が通例であるが、今回は学会開催日が例年より少し早く、代議員会の案内を載せるために10/８に発行した。HPは10月中旬に更新が少し遅れたが、再発防止に努めるとの報告があった。

７．平成26年度事業計画と予算案

車谷地方会長から当日配付資料に基づき、平成26年度予算と事業計画について説明があった。公益法人化にともない、次年度予算と事業計画は11月末に本部事務局に所定の様式で提出することが求められていることから、平成26年度事業計画案と予算案の提案があり、承認された。　以上

2013年度第２回代議員会

日　時：2013年11月2日（土）12：45～13：15
場　所：京都大学大学院医学研究科Ｇ棟２Ｆセミナー室Ａ

１．第53回近畿産業衛生学会（京都）会長ご挨拶

→幹事会議事録参照

２．議長の選任

上原新一郎代議員を議長に選出

３．代議員会の成立確認

代議員現在数118名。出席36名、委任状42名、計78名で、現在数の過半数により地方会会則第13条により代議員会は成立。

４．議題→幹事会議事録参照

１）第54回近畿産業衛生学会（大阪）準備報告
２）第55回近畿産業衛生学会（兵庫）学会長の決定
３）選挙管理委員会委員長の選任報告
４）地方会ニュース発行とHPの更新状況
５）第88回日本産業衛生学会第１回企画運営委員会WG報告

５．議長解任

会員の異動（敬称略）

〈新入会員〉

田　有起子	パナソニックライティングシステムズ㈱ 春日工場
友井　弘子	天理よろづ相談所病院健康管理室
辻村　友香	京都大学大学院医学研究科社会健康医学専攻健康情報学
上野　香菜	一財）京都工場保健会
花田　貴彰	一財）京都工場保健会
市口　りえ	㈱デサント
川村小千代	和歌山医大大学院保健看護学研究科
那須　文実	和歌山医大大学院保健看護学研究科
住田　光顯	
岸本　知弘	きしもと歯科医院
奥田　大造	オクダ歯科
城徳　昭宏	城徳歯科医院

近畿地方会総会の日程のお知らせ

平成26年度の日本産業衛生学会近畿地方会の総会は平成26年６月21日（土）です。ご予定おきください。

産業医募集のお知らせ

募集職種：専属産業医（嘱託社員）

勤 務 地：長浜キヤノン株式会社　健康支援室
〒526-0001　滋賀県長浜市国友町1280

勤務時間：７：55～17：00

休日・休暇：年間休日125日（週休２日）
年末年始、５月、８月に各一週間程度連休あり

採用時期：応相談

待 遇 等：委細面談の上
長浜キヤノンでは専属産業医を募集しています。琵琶湖や長浜城など史跡や名勝に囲まれており全国の住みやすい街No.1に選ばれた事のある街、長浜で活躍してみませんか。皆様のご応募をお待ちしています。

【お問い合わせ先】
長浜キヤノン株式会社　安全衛生課　雲
ＴＥＬ　0749－65－2783
Ｅmail：kumo.yoshio@canon-nagahama.co.jp

編　集　後　記

会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。昨年日本で印象に残った出来事は色々ありますが、スポーツ界では何と言ってもプロ野球で楽天イーグルスが初の日本一に輝くとともに、マー君こと田中将大投手が開幕24連勝無敗の世界記録を達成したことではないでしょうか。

田中投手のインタビューでは、「この記録は自分一人のものではなく、投打でサポートしてくれた野手がいればこそ」というチームワーク重視の言葉が聞かれました。翻ってこの姿勢は私達にも必要なもので、今年一年お互いに力を合わせて産業保健活動に従事したいと思います。（藤岡　滋典）

編集委員（五十音順）
河合　俊夫　鈴木　純子　竹村　　芳
中西　一郎（広報事務局）
藤岡　滋典　丸山総一郎　森口　次郎
山田　誠二（編集責任）